HUE RISE
北海道教育大学　へき地・小規模校教育研究センター（通称：へき研センター）
Hokkaido University of Education Research Institute for Remote and Small School Education（aka HUERIS 3）
令和５年４月１１日発行　第１２１号

へきけんニュース

ホームページ　https://www.hokkyodai.ac.jp/edu_center_remoteplace/
メールアドレス　kus-hekiken@j.hokkyodai.ac.jp
☎ 0154-44-3291　FAX 0154-44-3292

背景は北海道教育大学釧路校

２０２２年度 和歌山大学 教育学部 教職実践支援ユニット「教育実践による地域活性化事業フォーラム」を視察

令和５年３月６日（月）に行われた上記フォーラムに、３キャンパスのへき地教育アドバイザー（柿崎・伊端・荒川）の３名が参加しました。和歌山大学のへき地・小規模校教育に関する実践及びこのフォーラムは長い歴史を持ち、北海道教育大学がその多くを参考にさせていただいているものです。

永井邦彦 理事・副学長

本山 貢 教育学部長

系統性・連続性を重んじる価値ある取組

開会挨拶では永井邦彦理事・副学長が、コロナ感染症対策のため実施できなかったこのフォーラムが３年ぶりに実施されることについて、「一年で一番楽しみにしていた行事が見られる」と、その喜びを表現していらっしゃいました。１年生の「小規模校活性化事業」から３年生中心の「へき地・小規模校実習」、教職大学院の学生による「小規模校実習」に至るまで、学びを積み上げる連続性が、学生の成長に大きな効果を生み出し、フォーラムにおいてその姿を見られることがその理由であることを熱く語りました。本山　貢 教育学部長のご挨拶では、系統性のあるこれらの実習の効果の一つとして、「卒業生の６割しか教員になっていない中で、実習経験者の１００％が教員になっている」という報告がありました。

その後参加した『テーマ別発表』・『ポスターセッション』は、まさしくお二人のご挨拶の言葉を裏付ける素晴らしいものでした。

フォーラム進行の流れ

進行　島津 俊之 教職実践ユニット長、教育学部副部長

開会挨拶　永井邦彦 理事・副学長
本山　貢　教育学部長

＜テーマ別発表＞
○小規模校活性化事業
○へき地・複式教育実習
○小規模校実習

＜学生による ポスターセッション＞

＜発表の講評＞
龍田　俊樹 和歌山県教育委員会 義務教育課教育課程班 指導主事

＜本年度の総括＞
平山 郁芳 ・ 桂 俊哉
（和歌山大学客員教授）

テーマ別発表

「テーマ別発表」では、各学年や教職大学院学生による地域密着型の実習や体験活動について、テーマごとにスライドを示しながら、学生たちが分担、あるいは代表して、それぞれの学びを説明しました。

「小規模校活性化支援事業」 学部１・２年次生対象

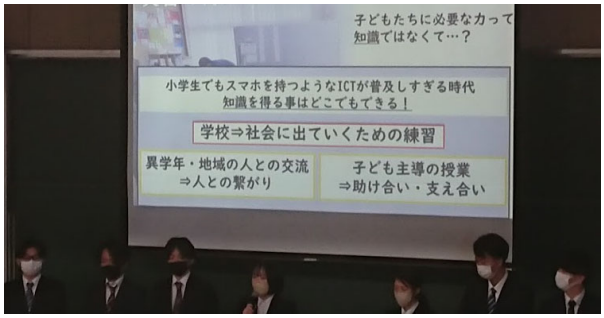
主に１年次生が対象となるこの事業は学校の様々な行事を参観・体験し、小規模校の良さ、特徴を学ぶというもの。具体的な活動は「運動会の準備と運営」「学習支援」「給食の手伝い」「環境整備」「集団登校」の付き添いなど。それぞれのグループの学びの多くに共通していたのは『子どもが主体となった課題作り』『学年を超えた子供たちのつながり』『先生と子供たちの深いつながり』そして『地域と学校のつながり』です。

また単にその発見を発表するにとどまらず、複式学級から大人数の学校へ進学する大変さへの対応等、課題の発見や教師が自ら地域で学ぶ必要性を感じるなど、さらに一歩深めた発表も聞かれました。

「へき地・複式教育実習」 学部３年次生対象

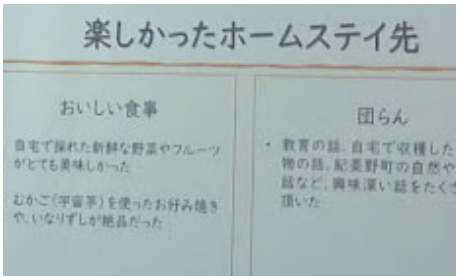
３年次生対象のこの実習に臨んだ学生は、全員が１，２年次の実習を経験しているわけではないそうです。しかし、主免実習をすでに経験してからの実習ということで、学びをより深めているという印象でした。複式の授業で２学年分の教材・教具づくりや「わたり」「ずらし」を体験し、身をもってその大変さを知るとともに、あらためて小規模校の特色を活かし、子供たち一人一人に合わせた対応が必要であることを学んだと伝えていました。

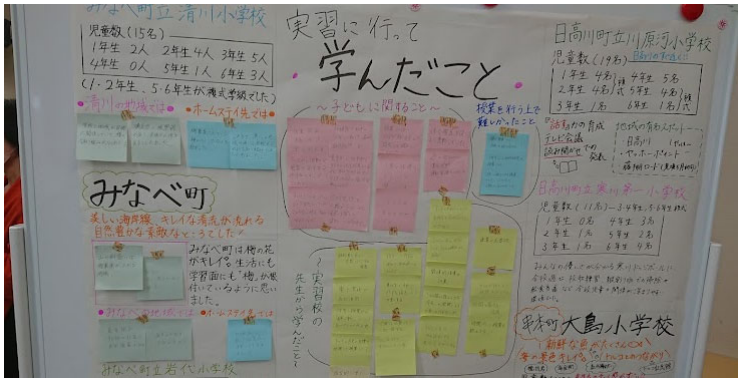
「小規模校実習」 教職大学院生対象



教職大学院の学生にとって、この実習は必須。その後のポスターセッションで話を伺っても、それぞれに意欲・主体性がより強く感じられました。様々な経験を積んでいるだけあって、プレゼンにあたってはクイズを出しながら課題もあげ、さらにはそれを克服するための考察もなされていました。中でも印象的だったのは、これだけICT が普及している時代、それに頼りすぎているのではないかと疑問を感じ、「博物館では主体性を持つきっかけを作れる」という発見とともに、ただ博物館に行くだけではなく、学校の学びと博物館を結びつけるための教師の役割にもふれるなど、さらに一歩踏み込んでいることに驚きました。

３つのテーマごとの発表に共通するのは、宿泊させていただいたホストファミリーをはじめ、実習を支えてくれた人たちへの感謝の気持ちがとても伝わったことです。それぞれが原稿の棒読みではなく、とても気持ちがこもっており、どれだけこの実習が充実したものであったかを感じられるものでした。また、今回のフォーラムに参加されたホームステイ先の方もいらっしゃり、学生たちの発表を温かく見守っている姿もとても印象的でした。



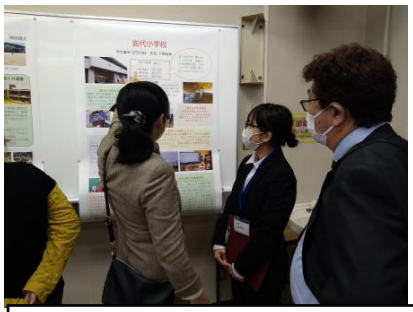


テーマ別発表はテーマごと、グループごとによるものであり、北海道教育大学で行なわれているような実習校ごとの発表ではありませんでした。その分、発表チームごとに討議を重ね、左のようにまとめた上で、発表原稿を作成したのだそうです。

実習校相互にそれぞれの体験を交流し合い、まとめる手法はとても参考になりました。

ポスターセッション

全体会のテーマ別発表では、それぞれの実習の特徴を知ることができました。その後のポスターセッションでは、実習を行った学校ごとに話を聞くことができ、全体会において興味を持った様々なことを、直接質問できる貴重な機会となりました。



参観者に熱心に説明する学生たち。「実習でいろいろな世代の人達と話すことができて引き出しが増えた」「教職への意識がより高まった」と語る姿が頼もしく見えました。

この実習に臨んだ動機を聞かせていただくと「入学前から興味を持ち、参加したいと思っていた」と多くの学生が語っていました。実習前にはへき地・小規模校について学ぶ機会はあまりないようですが、実際に実習に行くことによって「板書は対話を活発にするための一つの手立て」など、それぞれにたくさんの発見があったことを熱く伝えてくれました。

大学院生の方々は、「大規模校での実習で未解決な課題を解決できた」「小規模校で指導する際には、子どもの思考を促すためにも、教師の側の余裕が必要。さらに大規模校にありがちな『隠れた違い』を埋め合わせる」ためにもそれが必要」という発見あったことを伝えてくれました。

自らも小規模校出身で「子どものころから小規模校が大好き」という学生の「なぜ好きなのか、実習に行ってよく理解できた」という言葉も印象的でした。

今回のフォーラム以外にも「報告書」の提出があることを教えてくれた学生さん。「やることがたくさんあって大変じゃないですか？」と問いかけると「書きたいことがたくさんありすぎて、むしろページが足りないくらい。学んだことをもっと伝えたい！」と応えてくれました。

発表の講評

龍田俊樹　和歌山県教育委員会
義務教育課教育課程班 指導主事

龍田指導主事からは、この実習全体が「つながり」を大切にしたものであり、今後もそれが継続することへの期待と、小規模校での学びが中・大規模校でも使えることを、自らの経験もまじえて語られました。

本年度の総括

平山 郁芳 ・ 桂 俊哉
（和歌山大学客員教授）

今年度をもって退官されるお二人への感謝のセレモニー。絆の深さがとても伝わりました。

最後に総括としてお二人の客員教授（コーディネーター）からのまとめがありました。とても愛情あふれる言葉で、午前中のリハーサルのことなど、学生たちにとって強い支えとなり、この実習に取り組んでいることがうかがえました。

「実習そのものも大変だったでしょうが、まとめなど、その他の苦労も多かったはず。しかしその姿を見せることで先輩から後輩へ、脈々と学びがつながっていく」とお話しされたことが印象的でした。

またいくつかの課題もあげ、その一つが例年９月に行われる運動会が、温暖化の影響もあって、春や１０月に実施される学校が出てきたこと。今後もこの傾向が続くと、１年生の実習の方法が大きく変更せざるを得ません。また実習生を受け入れていただくホストファミリーの高齢化の関係で、負担にならない工夫の必要性についても述べられていました。いずれも時代・世の中の変化で臨機応変に実習を進めなければならない課題。本学にとっても気を引き締められる言葉でした。

第７２回年 全国へき地教育研究大会の案内

最後に柿崎秀顕 全国へき地教育研究連盟会長と開催地を代表して近畿ブロックの堀香織副会長から、第７２回研究大会について案内されました。

フォーラムに参加して

北海道教育大学がへき地・小規模教育を推進するにあたって参考にしてきただけあって、大変勉強になったとともに、学生たちの真摯に向き合う姿が感動的なフォーラムでした。ホームステイという北海道教育大学にはあまり例がない形態がとられているためもあってか、地域との連携が非常に強いことがうらやましくも感じました。

開会式では副会長から「地域全体が教材ということを学び、地域の教育に貢献できる人材が育っている」という印象的な言葉がありましたが、私たちの実習もそうあるよう頑張ります。